



エッセイ

# 足尾を去る人守る人

環境企画 松村 眞

発行日  
2012.7.10

渡良瀬川（わたらせがわ）は、栃木県と群馬県の境にある皇海山（すかいさん）に源を発し、足尾山塊の水を集めて美しい溪流になる。流れは草木ダムを経て南西に下り、赤城の山麓で南東に向きを変える。溪流は水嵩を増しながら桐生市、足利市、館林市を経て、古河市の渡良瀬遊水地に至る。渡良瀬遊水地は、明治時代に足尾銅山の廃水に含まれる鉱毒を沈積させ、下流の稲作被害を防ぐために造られた。この地域に頻発する洪水を防ぐ目的もあったが、土地を奪われる谷中村の農民が激しく抵抗した。立ち退き命令が出て家を取り壊されると、雨も防げない粗末な小屋を建てて居残った。衆議院議員だった田中正造は私財を投げ打って農民を支援し、代議士を辞めて農地買収を阻止する活動に奔走した。強制買収の不当を法廷に訴え、死を覚悟して天皇に鉱毒被害を直訴しようとした。城山三郎の「辛酸」には、公害の原点と言われる足尾鉱毒事件と、田中正造を指導者と仰ぐ農民の抵抗運動が生々しく記されている。渡良瀬川は 32 万平方メートルの遊水地を経て、古河市と埼玉県加須市の境界で利根川に合流する。渡良瀬川の流路延長は 107 キロメートルだが、足尾地区の神子内川との合流点から上流は松木川（まつきがわ）と呼ばれている。

足尾銅山は江戸時代に採掘が始まり、1600 年代の後半には年間 1,200 トンの銅を産出して、当時の通貨である寛永通宝を鑄造していた。しかし、その後は採掘量が徐々に減り、幕末から明治の初期にはほぼ閉山状態になっていた。足尾銅山の将来性に悲観的な意見が多い中、明治 10 年（1877 年）に古河市兵衛が払い下げを受けて経営に着手、明治 14 年（1881 年）に待望の有望鉱脈を発見した。その後は探鉱技術の進歩によって次々に有望鉱脈が発見され、20 世紀初頭には年産 6,000 トンを超えて、日本の銅生産量の 4 割を担う大鉱山に発展した。一方、大規模な鉱山開発によって大量の土砂が渡良瀬川に堆積し、天井川になって洪水を引き起こした。坑道と精錬所から硫酸銅と硫酸鉄を含む廃水が流出し、下流で稲の立ち枯れが発生して農民の窮状を招いた。精錬所周辺の山林では、精錬の燃料と労働者の住宅のために大量の樹木が伐採された。長く伸びる坑道の支柱にも、大量の木材が必要だった。残された細い木も精錬所が吐き出す硫酸化合物で枯れ、酸性の雨が下草の根まで枯らしてしまった。このため、雨が降るたびに斜面で土砂崩れが発生し、茶褐色の土壌がむきだしになった。こうして足尾の山林は、約 8 割が樹木の全くないはげ山になったのである。

私は以前から一度は足尾銅山の跡地に行ってみたいと思っていた。足尾銅山は1973年に閉山したが、その後の町の状況や修復している山林を見たかったからである。残されている坑道と精錬施設にも関心があった。足尾は私の住む横浜から近いようで遠い。100キロメートルぐらいの距離なのに、片道5時間もかかる。乗り換えが多だけでなく、桐生から足尾に至る「わたらせ渓谷鐵道」が1時間半もかかるからである。このジーゼル車は、単線なのでゆっくりと自然の中を走る。私が行ったのは6月の下旬なので、片側には山の緑が迫っていた。野生の動物が多いらしく、途中で運転手がけたたましく警笛を鳴らして急ブレーキをかけた。線路の前に急に鹿が出てきたのである。山の反対側は曲がりくねった渓谷で、白い岩肌の谷間をエメラルド色の溪流が流れる。流れが激しい場所の岩肌は、大きな岩盤だったり巨石だったりする。晩秋には紅葉が美しいに違いない。

わたらせ渓谷鐵道は、足尾銅山で産出される銅製品の輸送のために敷設され、1914年に桐生から最上流の間藤まで開通した。足尾地区は上流の通洞駅、足尾駅、間藤駅の周辺である。旧足尾町の人口は、最盛期には4万人近かったが、今は1割以下の2千6百人に減り、日光市の一部に組み入れられている。人口が集中しているのは通洞駅の近辺で、小中学校と市役所の支所がある。通洞駅から数分も歩くと、坑口だった足尾銅山観光の入り口に来る。足尾銅山には3か所の坑口があったが、通洞口の採掘量が非常に多く、最盛期には周囲に鉱夫の住宅が密集していた。排出された土砂も多く、現在は堆積場の跡地がグラウンドに転用されている。坑道の延長は1,234キロメートルというから、東京・博多間に匹敵する距離である。通洞口の入り口から約700メートルが解放されており、トロッコで入ると夏でもひんやりと冷たい。周囲の壁からしみ出す地下水が足元の側溝に流れている。坑道の両脇と天井は、数メートル間隔で直径30センチはあろうかと思われる立派な支柱で支えられている。坑道の延長が長いことを考えると、鉱山の開発に大量の木材が必要だったことがよくわかる。坑道を進むと、ところどころに機械人形を使った採掘状況の展示がある。江戸時代のタガネとハンマーを使った手堀りから、削岩機を使った近代的機械堀りへの変遷が見られて面白い。

通洞駅の近くには足尾歴史館があり、歴代の人物写真や採掘の道具と鉱石のサンプルがある。足尾の歴史と、最盛期の町の様子や模型が面白い。手で動かせる劇場の模型がよくできているので質問したら、地元のシニアボランティアが作っているとのことだった。山林の再生活動を示す展示も興味あるものだった。足尾は昭和30年代から植林を続けているが、初めは種を植えても雨が降るとすぐに土砂とともに流されてしまったとのこと。そこで斜面の高さに沿って数メートル間隔で土留めの柵を設け、段々畑のようにしてから土を乗せ苗を植えている。数百段にもなる土留め柵が、下から上まで延々と続いている写真があった。毎年、

1500人ぐらいのボランティアが植林を続けており、その熱意と行動力に頭が下がる。足尾歴史館では説明員が入館から退館まで案内し、詳しく説明してくれた。慣れているとはいえ、銅の生産量や時期的な質問だけでなく、採鉱方法や精錬の技術的な質問にもたちどころに答えられるのに感心した。この歴史館はNPO法人の運営で、説明員は全員がシニアのボランティアである。

足尾歴史館をでると渡良瀬川の河原に降りた。清く澄んだ美しい流れである。当時、この川が大量の土砂にまみれ、雨が降れば茶褐色の濁流になり、鉱毒を流し続けたことなど想像もできない。この日は通洞から8キロほど山に入った足尾温泉に泊まった。この宿は100名以上が泊まれ、研修室なども備えていることから、足尾銅山の関係者も利用していたのであろう。だが今は主に地元の人々の保養地になっており、平日のせいもあって宿泊者は少なかった。周辺は鹿が多く樹木の皮を食べてしまうので、木々の下から2メートルぐらいまで食害を防ぐプラスチックの網が巻かれていた。もしかかも出没するという。夜は熊が出るので出歩かないように注意された。鹿は年々増えているようで、森が豊かになり冬を越すのが容易になったからだと言われた。猿も多いようで、翌朝、通洞に戻る車の窓からも見かけたし、植林している山中にはもっと多いとのことである。

通洞駅から足尾駅に向かって線路沿いの道を歩くと、両脇に廃屋が多いのに気がつく。人家がほとんど途絶えた所に無人の足尾駅があり、近くに足尾銅山の迎賓館だった古河掛水倶楽部がある。百年前の贅沢な木造建築で、シーズンの土日だけ開館している。宴会に使われた大部屋や、パーティー用の洋間があり、当時のピアノも残されている。外国人も泊まったのであろう、洋間の寝室が5部屋とビリヤード台が2台あり、今では珍しい象牙の赤白ボールまであった。足尾駅からさらに上流の間藤駅までくると、最盛期の繁華街だった地区があり、100軒を超える商店の案内板が残っていた。だが今は廃屋が並び、たまにすれ違う人は年寄りばかりで子供の姿はない。間藤を過ぎてしばらく歩くと、植林中の山林が見える。すでに育った緑と若い緑がまだら模様になっており、急斜面はまだ再生できていない。失われた森林は放置しておけば回復するように思っていたが、森林の喪失は土壌の流出をとまらぬので、容易に修復できないことがよくわかった。古河橋までくると、残されている精錬所が右手に見える。設備は残っているようだが、入口が閉鎖されていて入れなかった。でも外から古びた硫酸タンクが3基と、30メートルぐらいの煙突が見える。この精錬所が明治から昭和に至る銅精錬業の発展と同時に、深刻な足尾鉱毒事件の原点になったことを思い感慨が深かった。間藤では人気のない家のシャッターに、切ない思いが書き残されていた。「故郷って 何処となく何となく 仕方なくも住み慣れた処だけに 其処・此処・彼処に思い出が有り 離れがたし 捨てがたし」。この住人の去就は定かでない。

(おわり)



無人の足尾駅



古河掛水倶楽部



精錬所と渡良瀬川



精錬所の煙突



残された硫酸タンク



精錬所近くの山林